

## 十勝岳の火山活動解説資料

札幌管区气象台  
地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げ＞  
62-2 火口及び振子沢噴気孔群付近では、熱活動のさらなる高まりが認められています。また、3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動が続いており、4月以降は火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加、62-2 火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化が認められています。

十勝岳では、火山活動が高まっており、62-2 火口から概ね 1.5km の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があることから、本日（18日）11時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

### 【防災上の警戒事項等】

62-2 火口から概ね 1.5km の範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

### ○活動概況

#### ・噴煙など表面現象の状況（図2-①～③、図3-①、図5～9）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態で経過しており、活発な噴煙活動が続いています。5月以降は噴煙がさらに高く上がる日も時折みられており、6月12日には一時的に火口縁上1,500mまで上がりました。

62-2火口付近では、4月以降、高感度の監視カメラによりごく微弱な発光現象（火映を含む）を度々観測しています。この現象は、62-2火口付近での高温のガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられます。

6月16日から17日にかけて実施した現地調査では、62-2火口及び振子沢噴気孔群で高温の火山ガスが活発に噴出していることを確認し、噴気域の拡大や噴出量の増加が認められました。また、62-2火口では、火口底の一部で繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

これらのことから、62-2火口及び振子沢噴気孔群付近では、熱活動のさらなる高まりが認められます。

#### ・地殻変動の状況（図2-⑧、図10～11）

GNSS連続観測では、山体を挟む一部の基線で3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化が認められています。

#### ・火山ガスの状況（図2-④、図3-②）

4月28日及び6月10日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は、それぞれ1日あたり1,200トン及び1,400トンで、3月以前と比べて多い状態となっています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・地震の発生状況（図2-⑤～⑦、図3-③④、図4）

62-2火口周辺の火山性地震は、4月頃からやや増加した状態となっています。また、62-2火口付近の地震活動は、4月頃から次第に高まっており、5月以降は一時的な回数の増加が時折観測されています。

○活動評価

十勝岳では火山活動が高まっており、62-2火口及び振子沢噴気孔群付近では高温の火山ガスの放出が継続すると考えられます。また、62-2火口から概ね1.5kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。



図1 十勝岳 警戒が必要な範囲

・62-2火口から概ね1.5kmの範囲(赤円内)では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

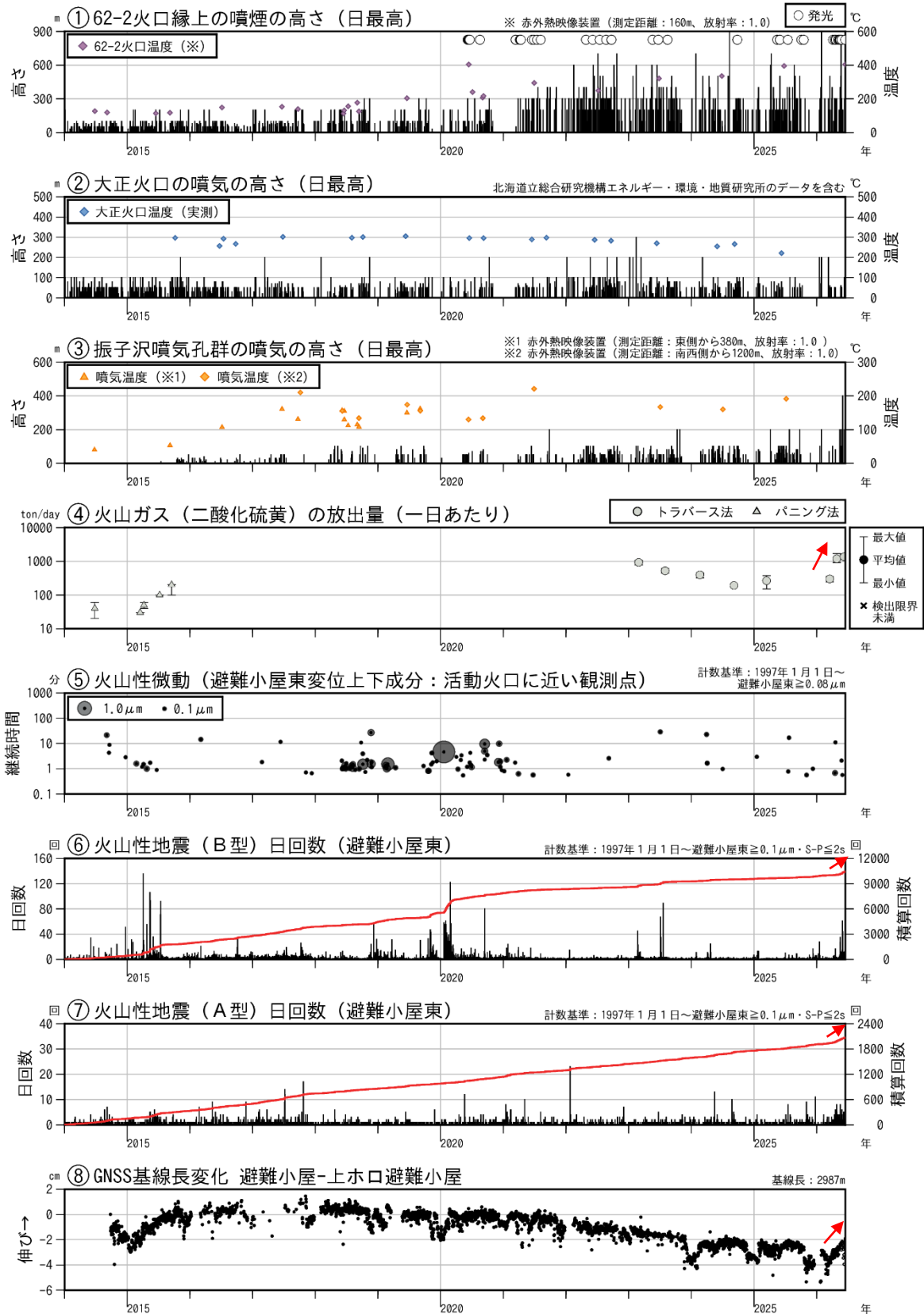


図2 十勝岳 火山活動経過図 (2014年1月1日～2026年6月16日)

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所(図4参照)で発生したと推定されるB型地震の回数、  
⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

⑧は観測点配置図(図11)の基線④に対応しています。白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

・2026年3月以降、火山ガス(二酸化硫黄)放出量の増加(④)、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化(⑥⑦)、山体付近のやや深部の膨張を示すGNSS基線の伸び(⑧)が認められています(赤矢印)。

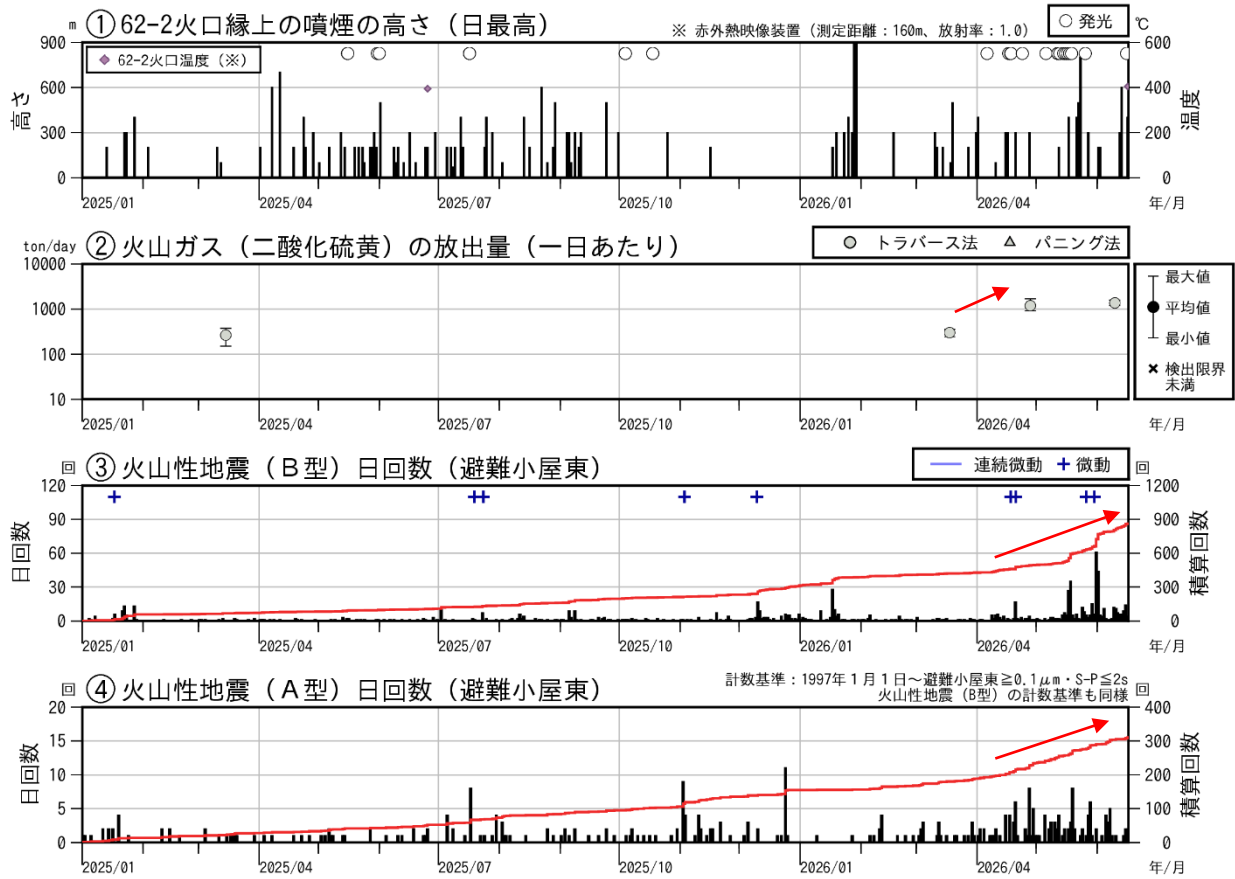


図3 十勝岳 火山活動経過図（2025年1月1日～2026年6月16日）

②は気象庁による観測結果のみを示します。

③は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図4参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

④は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

・2026年3月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（②）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（③④）が認められています（赤矢印）。

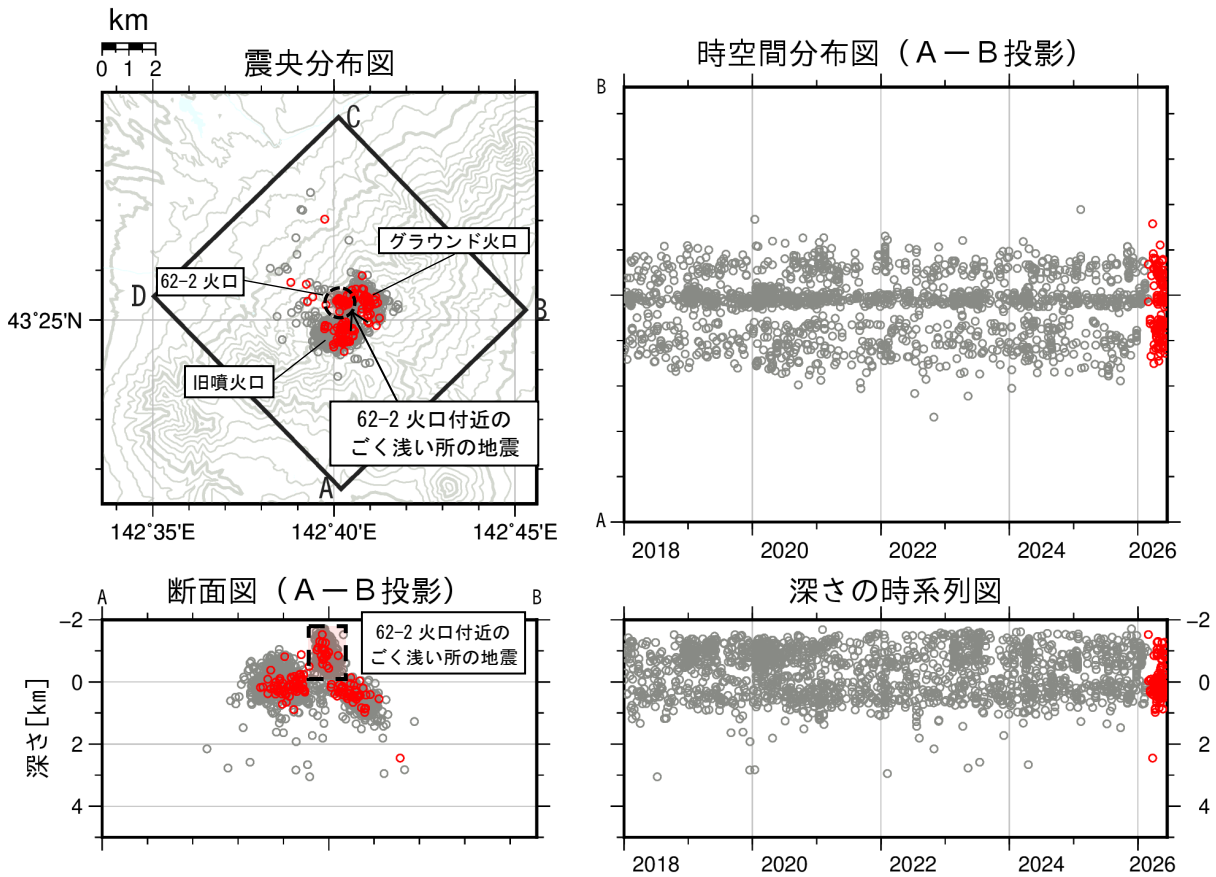


図4 十勝岳 火山性地震の震源分布 (2018年1月1日～2026年6月16日)  
○ : 2018年1月～2026年2月の震源 ○ : 2026年3月以降の震源

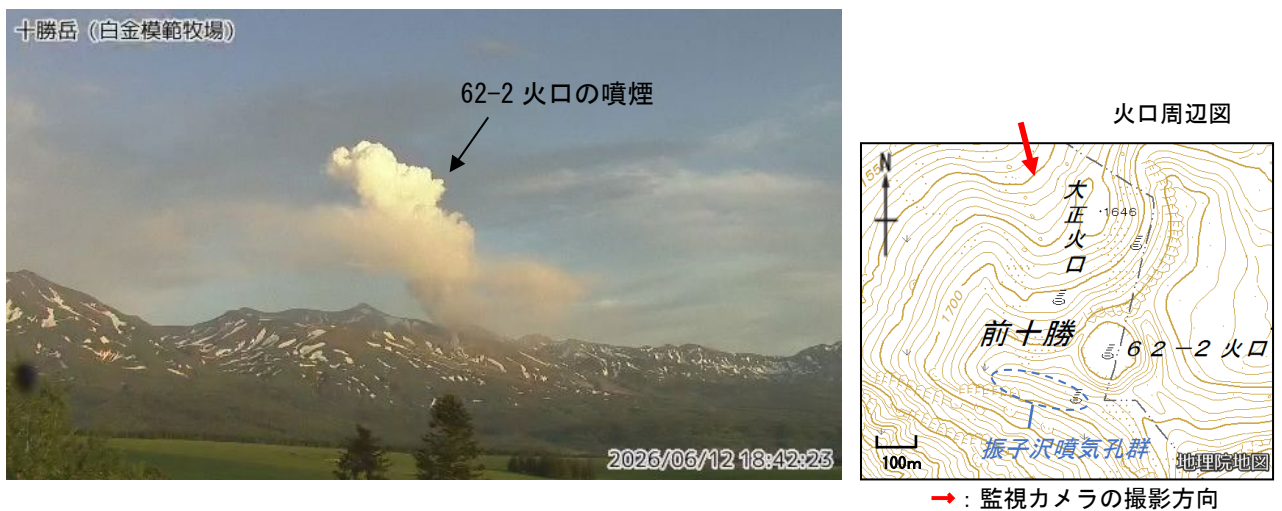


図5 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況 (白金模範牧場監視カメラによる) 及び火口周辺図  
・62-2火口の噴煙は、5月以降さらに高く上がる日も時折みられており、6月12日には一時的に火口縁上1,500mまで上がりました。



図6 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図7 十勝岳 62-2火口内の状況（図6の①から撮影）

- ・ 62-2火口内では、高温の火山ガスが活発に噴出しており、噴気域の拡大（桃色破線）や噴出量の増加が認められました。
- ・ 2026年5月の上空からの観測で認められた火口内の湯の量は減少しており、火口底の一部（白矢印）では、繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

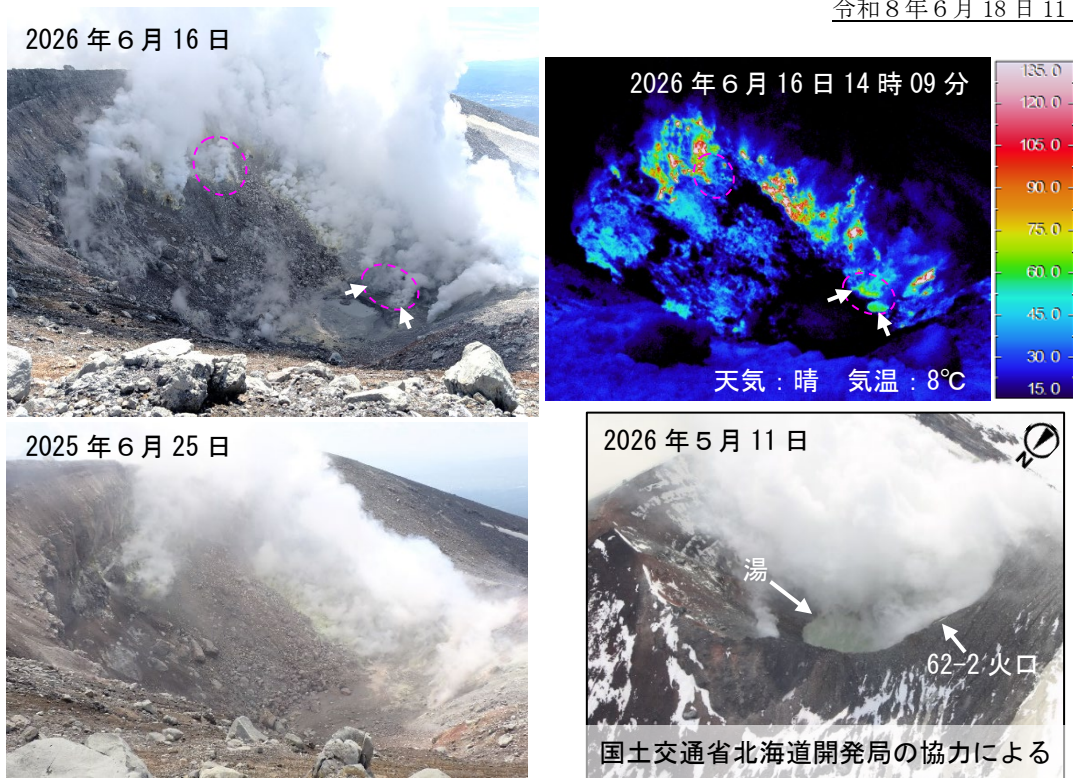


図8 十勝岳 62-2火口内の写真及び赤外熱映像装置による地表面温度分布

上：今回の現地観測の写真及び地表面温度分布（図6の①から撮影）

左下：2025年6月の現地観測による写真（図6の①から撮影）

右下：2026年5月の上空からの観測による遠景の写真（図6の②から撮影）

- ・62-2火口内では、高温の火山ガスが活発に噴出しており、噴気域の拡大（桃色破線）や噴出量の増加が認められました。
- ・2026年5月の観測で認められた火口内の湯の量は減少しており、火口底の一部（白矢印）では、繰り返し熱泥水が噴出している状況を確認しました。

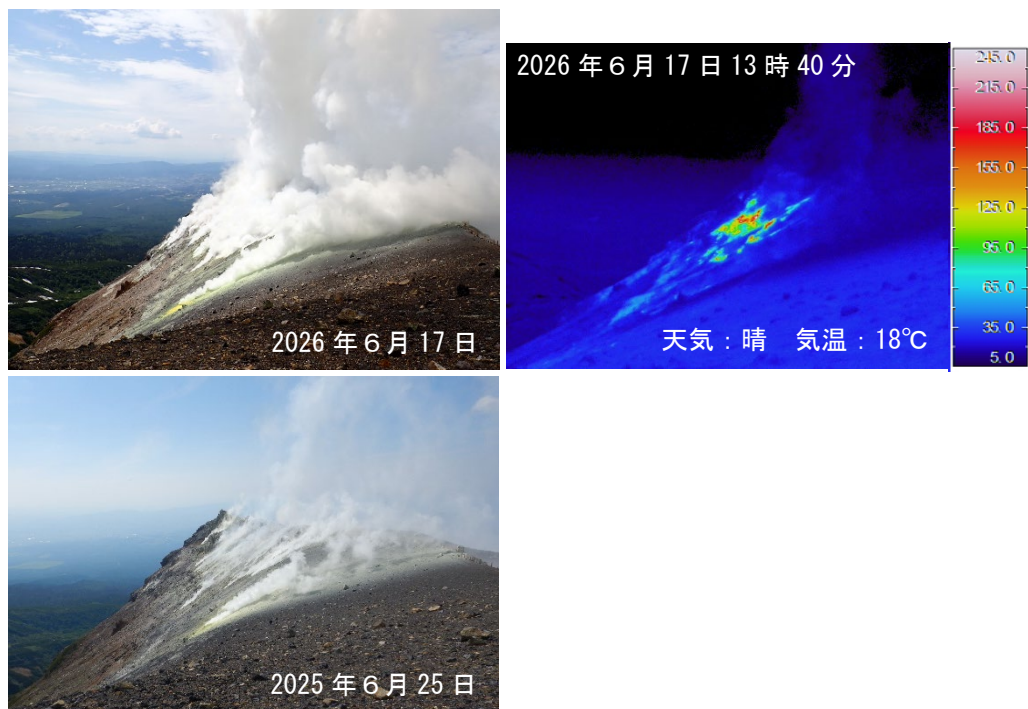


図9 十勝岳 振子沢噴気孔群の写真及び赤外熱映像装置による地表面温度分布（図6の③から撮影）

- ・62-2火口と隣接した振子沢噴気孔群でも、高温の火山ガスが活発に噴出していました。2025年6月の観測と比較して、噴気域の拡大や噴出量の増加が認められました。

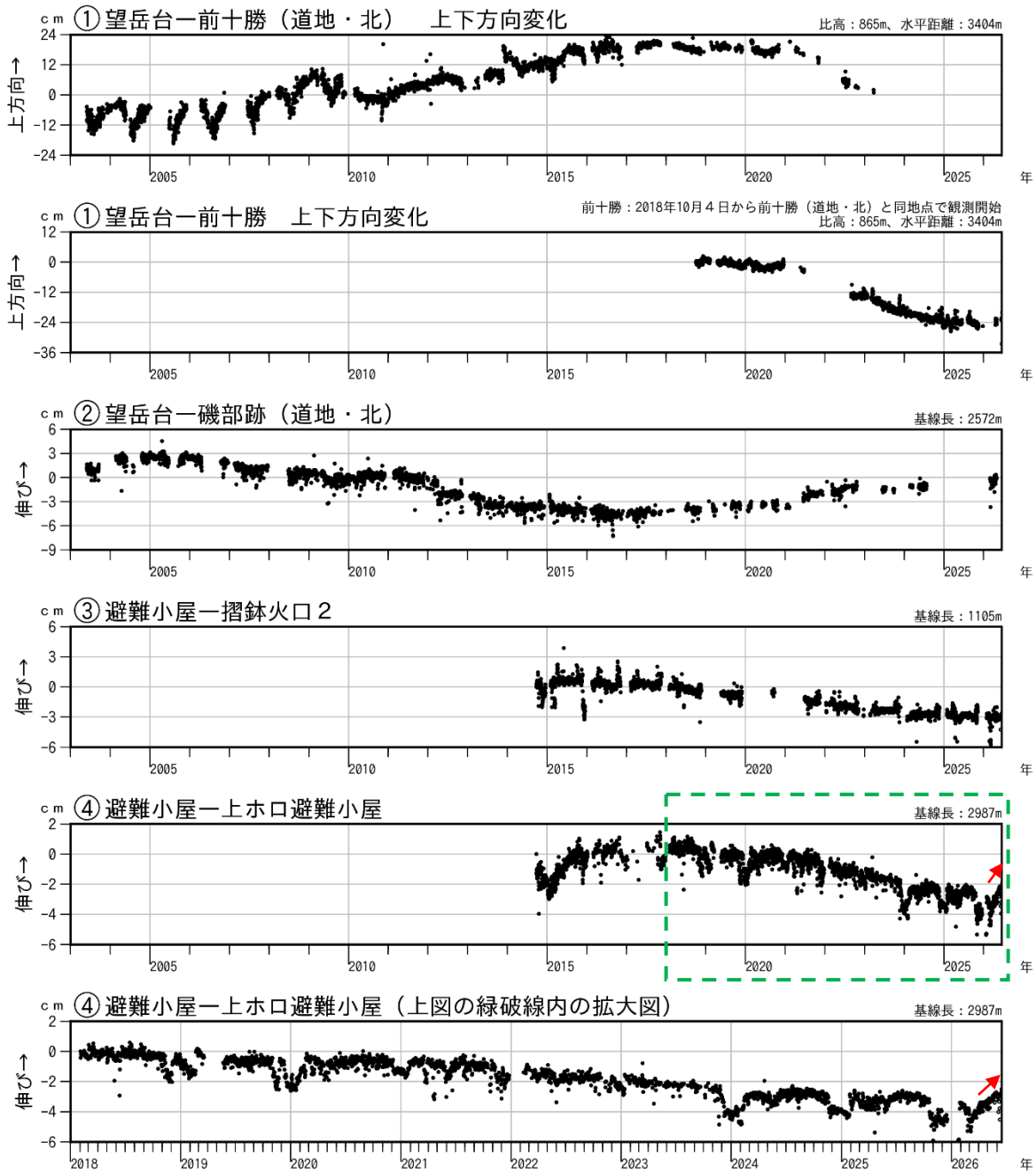


図10-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化 (2003年5月～2026年6月16日)

グラフ①～④は観測点配置図 (図11) の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

\* 1 : ステップ状の変化 (黒破線内) は機器変更によるものです。

各グラフの白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化 (赤矢印) が認められています。

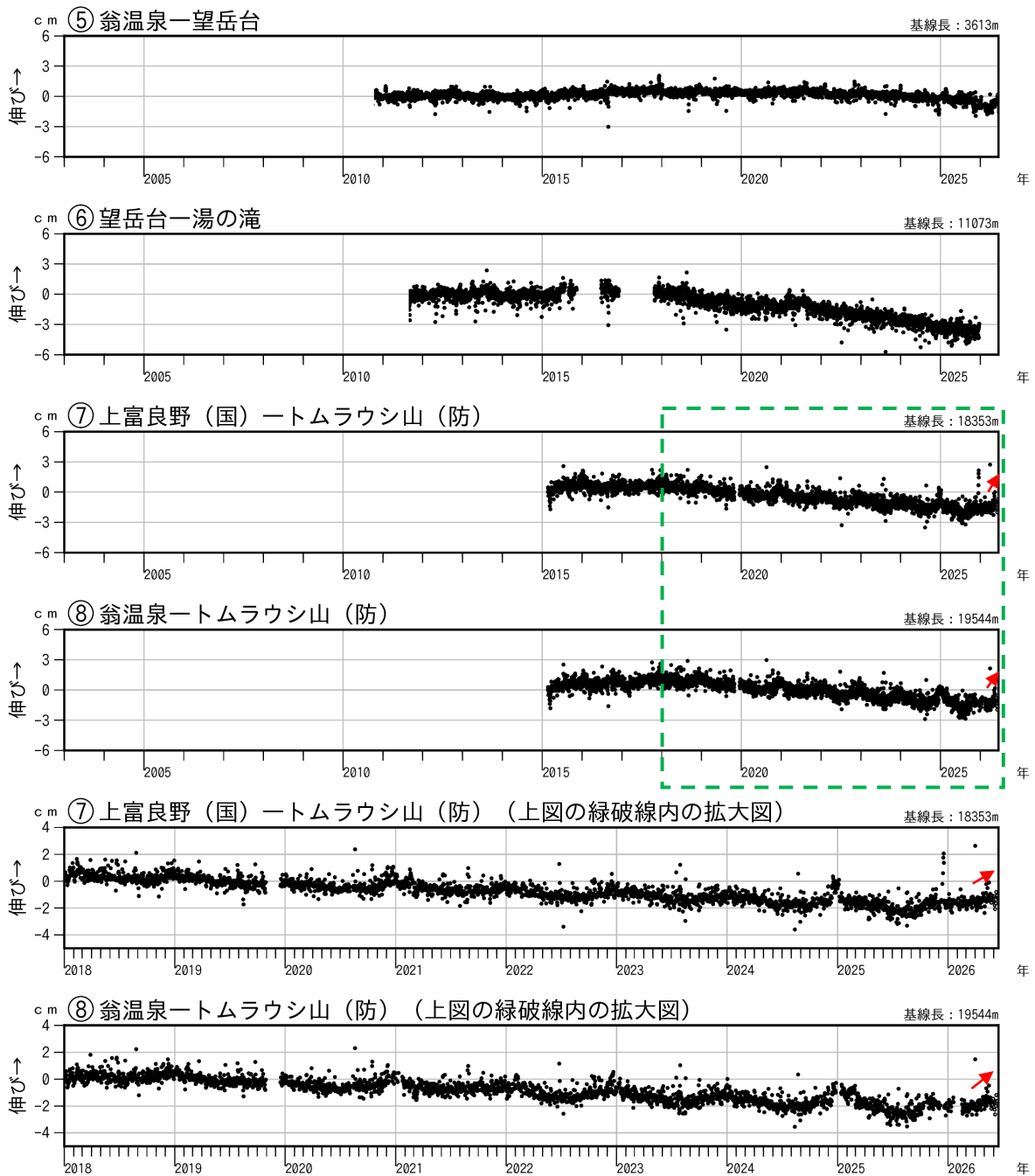


図10-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化（2003年5月～2026年6月16日）

グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図11）の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

各グラフの白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・ 基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは伸長傾向に転じています※（赤矢印）。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※ 例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

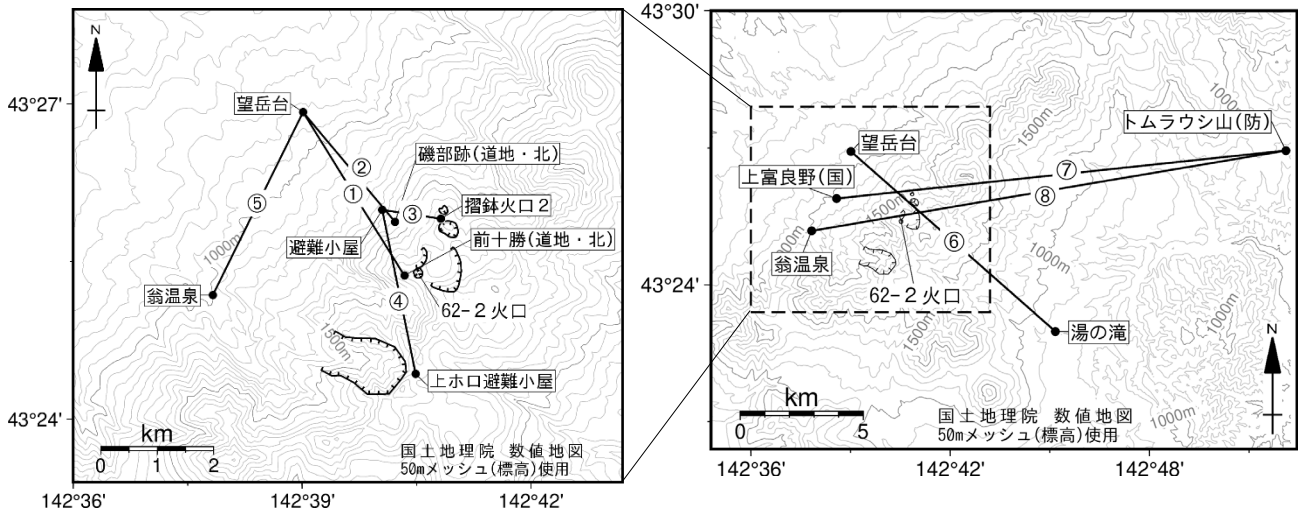
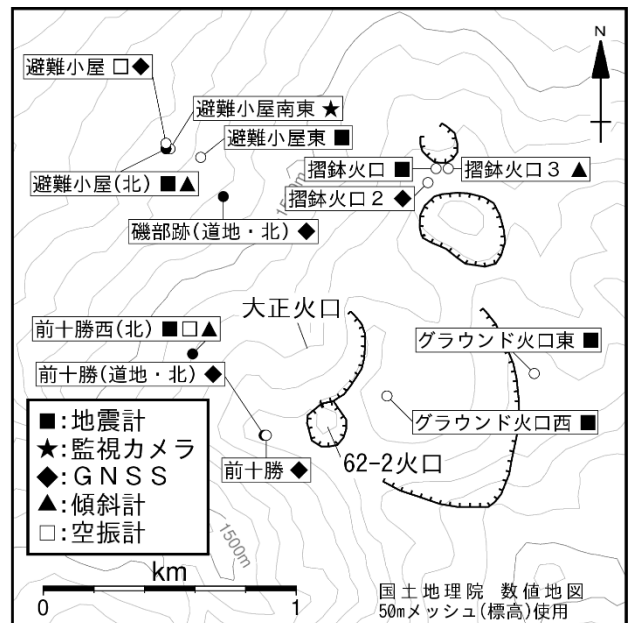
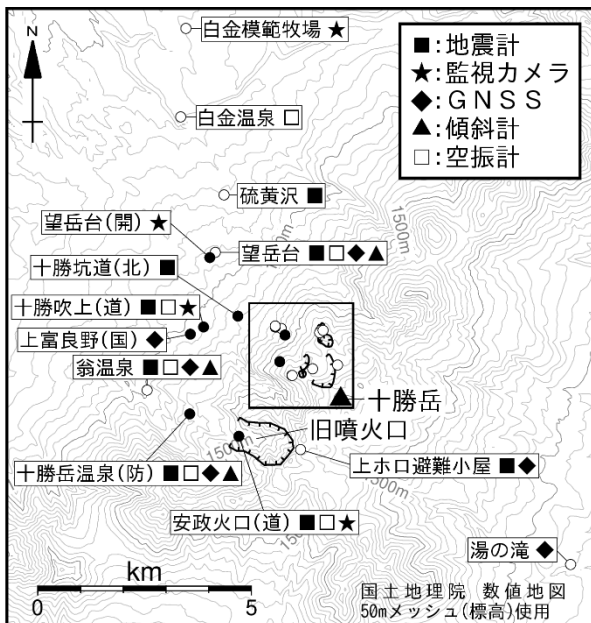


図11 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線④は図2のグラフ⑧に対応しています。

図中の基線①～⑧は図10のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。  
(開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、  
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図12 十勝岳 観測点配置図